

# 英語イマージョンクラス（教養的言語科目）の 現状と課題

—受講調査の結果から—

結 城 正 美

## 1. はじめに

本稿の目的は、教養的言語科目「英語C」として開講されている英語圏留学準備クラスの現状を部分的にはあるが検討し、今後予想される英語イマージョンクラスの拡充に向けて取り組むべき課題を洗い出し、将来の方向性を探る点にある。

英語C（英語圏留学準備クラス、以下「留学準備クラス」とする）は、金沢大学生の英語圏留学促進という全学的取組の一環として、外国語教育研究センターによって2003年度に体系的に構築された。<sup>1)</sup> レベル別（lower intermediate, intermediate, upper intermediate, advanced）に4クラス開講されており、いずれも教室での使用言語を英語とするイマージョン型のクラスである。内容は文学・文化・思想が中心的であり（表1）、英語を学ぶというよりは英語を用いて文化的問題を議論することを趣旨とする。教養的科目および金沢大学短期留学プログラム（Kanazawa University Student Exchange Program、以下「KUSEP」とする）の留学生とのジョイントクラスであるという性格上、受講生の専攻、学年、国籍はさまざまである。定員は英語Cの標準受入数と同様20名であるが、これにKUSEPからの受講生が加わる。ここ2年間の受講状況を見る限り、lower intermediateのクラスはKUSEPの選択必修科目であるため留学生の受講が多く、また金大生の受講も他の3クラスに比べて多いので、定員を超える傾向がある。他の3クラスは課題が多いためか、

アカデミックな主題を英語で議論する環境にストレスを感じるためか、あるいは他の理由に因るのか、受講生数は定員を超えることが稀である。<sup>2)</sup>

表1 留学準備クラスの内容

授業名	開講期	内容
英語C (留学準備クラス lower intermediate)	後期	多様なトピックについて英語で議論する。
英語C (留学準備クラス intermediate)	前期	環境の問題を題材とする。留学に必要な多読、発言、議論の力を鍛え、ペーパーを書く訓練をする。
英語C (留学準備クラス upper intermediate)	後期	環境言説・文学を題材とする。多読、議論、ペーパー執筆のスキルを磨く。
英語C (留学準備クラス advanced)	前期	日本文学(英訳)を題材とする。内容・課題ともにニアネイティブのレベルの授業。

## 2. 授業の概要と実践報告

英語イマージョンクラスに関する調査は、平成17年度前期開講「英語C」(留学準備クラス advanced)の受講生を対象に実施した。調査結果を検討する前に、まず当該授業の概要や目的を授業実践報告とあわせて説明しておきたい。この授業は英語翻訳で読める日本文学をテーマとするものであり、今回は水俣の文学を扱った。授業の概要、目的、課題、進行予定は資料1のとおりである。

### 資料1 英語C (留学準備クラス advanced) シラバス (抜粋)

KUSEP/English C  
Kanazawa University  
Spring 2005

#### Environmental Discourses on Minamata

##### Course Description

The focus of this course will be on the various discourses of Minamata. Minamata is a place which is strongly associated with Minamata Disease, a nervous system disorder caused by the methyl mercury-laced industrial waste emitted from a chemical plant in Minamata. The fact that Minamata Disease occurred in Minamata, not in Tokyo or in

Kyoto, should be examined to clarify the cultural, social, and political implications of this environmental problem. In order to address this issue, we will read and discuss essays and literary works on Minamata including Michiko Ishimure's *Paradise in the Sea of Sorrow*, which disseminated issues of Minamata with its powerfully-poetic, radically-political narrative. By reading literary works, students will also be encouraged to critically think about the efficacy of language and its ability to convey ideas and phenomena.

This seminar course will be a joint class for undergraduate students of Kanazawa University as well as KUSEP students. It is also designed to help those who wish to study abroad to improve their English.

### **Texts**

Ishimure, Michiko. *Paradise in the Sea of Sorrow: Our Minamata Disease*. Trans. Livia Monnet. Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan, 2003. [石牟礼道子『苦海浄土——わが水俣病』1969, 講談社文庫, 2004.]

Oiwa, Keibo. Narrated. Ogata Masato. *Rowing the Eternal Sea: The Story of Minamata Fisherman*. Trans. Karen Colligan-Taylor. Lanham, MD: Rowman and Littlefield, 2001. [緒方正人語り／辻信一構成『常世の舟を漕ぎて』世織書房, 1996.]

## **Course Requirements**

### **Class Participation**

Attend class and participate with engagement. Preparation is necessary: you need to read the assigned text thoroughly and develop the issues which you want to discuss during class.

### **Leading Discussion**

Each student will be asked to lead class discussion at least once during the semester. Discussion leaders should (1) choose topics drawn from the assigned text, (2) discuss them with me, (3) revise them if necessary, (4) and then distribute them to the rest of the class (probably by e-mail) in advance so that other students can prepare for the class discussion. In class, discussion leaders will be expected to structure and facilitate constructive and engaging discussion.

### **Essay Abstract Submission**

By the mid semester, you will be required to submit your essay abstract (250-400 words). In the abstract, you should clarify (1) what you are going to examine (topic) and (2) how you are going to discuss it (approach). Please add a working bibliography at the end of the abstract.

### **Essay Submission and Resubmission**

Please submit an essay (about 10 pages long in MLA format) during the semester. Your essay topic should relate to the main texts which we will have discussed in class. Write clearly and thoughtfully. The essay will be returned to you with my comments. Revise--correct grammatical errors, develop your topic, or clarify your argument--and resubmit

your essay. Submission and resubmission should be on time.

### Oral Presentation

Towards the end of the semester, you will be required to give an oral presentation on a topic you will have been working on. In order to make discussions on the presentation helpful and useful for your revision, all of you should read your classmates' papers prior to the presentations. During the class, each of you will have fairly short time to present your work, in order to allow for lively discussion following the presentations.

### Schedule

- Week 1 (April 13)** Orientation
- Week 2 (April 20)** Introduction  
Colligan-Taylor's Introduction and Ishimure's Prologue for *Rowing the Eternal Sea* (1-21)
- Week 3 (April 27)** Oiwa and Ogata, *Rowing the Eternal Sea* (1) : Part One (23-70)  
\*\*\*There will be no class on May 4 due to the national holiday.\*\*\*
- Week 4 (May 11)** Oiwa and Ogata, *Rowing the Eternal Sea* (2) : Part Two (71-125)
- Week 5 (May 18)** Oiwa and Ogata, *Rowing the Eternal Sea* (3) : Part Three (127-75) and Epilogue (177-85)
- Week 6 (May 25)** Monnet's introduction for *Paradise in the Sea of Sorrow* (vii-xxxiv)
- Week 7 (June 1)** Ishimure, *Paradise in the Sea of Sorrow* (1) Chapter One "Sea of Camellias" (1-63)
- Week 8 (June 8)** Ishimure, *Paradise in the Sea of Sorrow* (2) Chapter Two "Boat Cemetery" (65-129)  
**Essay Abstract Submission DUE**
- Week 9 (June 15)** Ishimure, *Paradise in the Sea of Sorrow* (3) Chapter Three "What Yuki Had to Say" (131-174) and Chapter Four "Fish of Heaven" (175-219)
- Week 10 (June 22)** No Class (I will be attending a conference in the US.)
- Week 11 (June 29)** Ishimure, *Paradise in the Sea of Sorrow* (4) Chapter Five "Fish on Land" (221-271)  
**Essay Submission DUE**
- Week 12 (July 6)** Ishimure, *Paradise in the Sea of Sorrow* (5) Chapter Six "Tonton Village" (273-301) and Chapter Seven "The Year 1968" (303-369)
- Week 13 (July 13)** Students' presentations and discussions
- Week 14 (July 20)** Students' presentations and discussions
- Week 15 (July 27)** **Essay Resubmission DUE**
- Week 16 (Aug. 3)** Course summary and final discussion

授業は学生主導のディスカッションを中心に進める。各週2名のディスカッションリーダーが議論のトピックを用意し、それを遅くとも授業前日までに受講生全員に配信する。受講生はトピックに関する意見や見解を深めて授業に臨むことが要求される。素材は文学であるが、議論のトピックは文学的である必要はない。今回は水俣の問題を扱った作品を題材としたので、トピックは環境・公害問題、近代化、権力構造、言語の政治性（方言と標準語の問題）など多岐にわたった。当該授業は受講生が計10名と小規模ではあったが、大抵の場合クラスを二分割し、数名の小グループで議論した後に全体で意見交換するという形式をとった。日本人学生は小グループの方が発言しやすい傾向があり、この形式によって発言する度胸を養った学生は少なくなかったようである。

ところで、授業がディスカッションリーダーを中心に進められるのであれば、教員の役目は何なのかという疑問が当然生じると思われるので、その点について説明しておきたい。授業において教員は、作品の紹介、評価、文学的・社会的意義など題材のコンテキストに関して説明し、議論の進行は基本的にディスカッションリーダーに任せる。しがたって、教員は主にコーディネーターとしての役割を担う。具体的には、(1) ディスカッションリーダーとの事前の議論と打ち合わせ（授業で扱うトピックに関するコメントや改善の指示、議論の進め方に関するアドバイス）、(2) 電子メールによる学生間の情報交換の確認（トピックの配信確認等）、(3) レポート指導が挙げられる。とりわけ、ディスカッションリーダーとの事前打ち合わせは、授業で有意義な議論を展開するためにきわめて重要である。というのも、ディスカッションリーダー自身がリーディングやトピックに関して見解を深めていなければ、授業が単なる発言の場になりかねないからである。無論、英語による発言はEFL（English as a Foreign Language）学習者にとって重要な訓練であるにちがいないが、当該授業はそこに目標をおいているわけではない。他者の意見をふまえつつそれを批判的に発展させるディスカッション・スキル、見解を異にする者との間にコンセンサスを導くネゴシエーション・スキル、それらが当該授業の目指す英語力である。したがって、ディスカッションリーダーはクラスの意見に耳を傾けながら、議論を牽引し展開させることが要求される。そのためには議論の題材

(作品) を相当読み込んでおく必要がある。教員がディスカッションリーダーに対して授業前におこなう指導には、彼(女)らの作品理解を助け、予想される議論の流れを考え、ともに授業の戦略を練るということが含まれている。学生主導のディスカッションを授業で成功させるにはそのような事前指導が鍵となる。

しかしながら実際の授業では、教員自身も議論に参加するわけだが、期待するように議論が深まらなかったり、脱線が続いたりするなど、教員からみて必ずしも満足できない状況に直面したことは少なくなかった。しかし、受講生による授業評価で受講生(金大生)7名中6名が「大変満足」という評価を下したことを考慮すると、学生主導のディスカッションを支援し強化するセミナー形式のイメージョンクラスの拡充は検討に値する課題であると言える。

### 3. 受講調査の内容と結果

調査の目的は、留学準備クラスを日本人教員のみが担当する現状を学生がどのように捉えているかを知ることにある。調査対象は、平成17年前期の英語C(留学準備クラス advanced)受講生である。通常ならば前期には留学準備クラスが2つ開講されるが、諸般の事情により1クラス(advanced)のみの開講となり、したがって調査対象も1クラスとなった。当該クラスの受講生は金沢大学生7名とKUSEPの学生3名の計10名である。受講生(金大生)の所属学部・学年、および留学準備クラスの受講歴は表2のとおりである。

表2 受講生の所属学部・学年・英語C（留学準備クラス）受講歴

学部	学年*	これまでの受講歴（平成17年前期「英語C」（advanced）は含まない）
教育	4	lower intermediate（1）, intermediate（1）, upper intermediate（1）
教育	4	lower intermediate（1）, upper intermediate（1）
文	4	advanced（1）
文	3	lower intermediate（1）, intermediate（1）, upper intermediate（1）
文	3	なし
理	2	なし
無記入	2	なし

\*前期開講の英語Cであるため、1年次学生の受講は原則的に認められていない。

調査は前期半ばに金沢大学生にのみ行い、7名全員から回答を得た。受講生の留学準備クラス履修歴はさまざまであり、したがって学生が評価の対象とする授業も一様ではないが、本調査ではそのような評価対象クラスの問題は処理できていない。また、調査と銘打つには母数が小さすぎることも問題かもしれない。しかし、たとえ母数は小さくとも、留学準備クラスの客観的評価として重要なデータであることはたしかである。以下、質問および回答とそれに関する意見である。

質問1と2における「中級クラス2つ」「上級クラス2つ」は、英語C（留学準備クラス）4クラスをレベル別に二分した場合の区分による。

### 質問1

留学準備クラスの担当教員に関して、次のいずれが最も良いと思いますか。

- A. すべて日本人教員が担当する。
- B. 中級クラス2つは日本人教員が、上級クラス2つはネイティブ教員が担当する。
- C. すべてのクラスをネイティブ教員の担当とする。

## D. その他

**回答と意見**

- A (1名)：日本人の先生の方が日本人学生の留学に関する不安や悩みをより理解しているように思うから。
- B (2名)：日本人教員とネイティブ教員にはそれぞれ良い面があるから。
- C (0名)
- D (4名)：「現状でよい」(担当教員の英語レベルが十分であれば、日本人であろうとネイティブであろうと関係ない、2名)、「中級をネイティブ教員、上級を日本人教員」(上級になるほど辛くなるので、日本人学生の甘えどころや辛さを理解する日本人教員が上級クラスを指導する方が効果的である、1名)、「わからない」(1名)。

**質問2**

担当教員と教室での使用言語に関して、次のいずれが最も良いと思いますか。

- A. すべてのクラスを日本人教員が担当し、すべて英語でおこなう。
- B. 中級クラスは日本人教員が担当し、日本語と英語を用いておこなう。上級クラスは、ネイティブ教員が担当し、すべて英語でおこなう。
- C. すべてのクラスをネイティブ教員が担当し、すべて英語でおこなう。
- D. その他

**回答と意見**

- A (1名)：日本語を使わずに何とかついていく姿勢が養えるから。
- B (1名)：留学準備クラスでは、教員が日本人であれネイティブであれ相違があるとは思えないので、英語使用であればどちらでも良い。
- C (0名)
- D (5名)：「実際の留学環境を想定して授業はすべて英語でおこなわれるべきで、教員はネイティブでも日本人でも良い」(2名)、「授業はすべて英語でおこなわれるべきで、中級クラスは英語に慣れるためにネイティブ教員、上



級は日本人教員がよい」(1名)、「授業はすべて英語でおこなわれるべきで、上級クラスに日本人とネイティブそれぞれによる授業があると良い」(1名)、「わからない」(1名)

### 質問3と回答

日本人教員が英語でおこなう授業に関し、あなたはどのように思いますか。該当するものをすべて選んでください。

- A. 日本人教員の英語の方がネイティブ教員の英語よりも聴き取りやすく、授業の内容が把握しやすい。それゆえ、授業に参加しやすい。(2名)
- B. 教室言語は英語だが、教室の外では日本語で質問や相談ができるので、授業についていきやすい。(5名)
- C. ノンネイティブの英語話者である日本人教員が英語を使う姿勢に接することにより、良い刺戟や励ましが得られる。(4名)
- D. アクセントの強い下手な英語を使わずに、日本語で授業をしてもらう方がよい。(0名)
- E. 留学準備として不可欠な「自分の意見を表明する」ことの訓練は、まず日本でおこない(日本人教員担当)、その後ネイティブ教員の授業で英語を用いて実践する方がよい。(0名)
- F. 留学はもとより、国際社会で生き抜くためには英語は不可欠であるので、日本人教員が英語で授業をおこなうことに抵抗はない。(4名)
- G. その他(0名)

## 4. 調査の分析

質問1(「留学準備クラスの担当教員に関して、次のいずれが最も良いと思いますか」)は、現行の英語C(留学準備クラス4クラス)がすべて日本人教員担当であるという事実に対する学生の評価を知るためのものである。この質問を調査項目の最初においたのは、私自身が、英語イマージョンクラスはネイティブ教員担当が適当であるという一般的な見解を無意識のうちに内面化して

いたからかもしれない。端的に言えば、現行の留学準備クラスの体制に学生が満足しているのかどうかを知りたかったのである。

結果は日本人教員による英語イマージョンクラスに肯定的なものであった。日本人教員が英語で授業をおこなうことに否定的な見解は皆無であり、却って日本人教員が担当することにより学生の英語学習へのモチベーションが高まることが判った。関心のある学生の英語力を国際社会で通用するレベルにまで引き上げるためには、今後、カリキュラムの再構築や教育法開発などさまざまな改革が必要であろうが、日本人教員による英語イマージョンクラスの拡充は積極的に検討されてよい。

ちなみに、KUSEP からの受講生（アメリカ人学生3名）に、本国での日本語学習についてたずねたところ、大学での日本語の授業は初級クラスで英語と日本語が用いられる以外は、ほぼすべて日本語によるという回答であった。本格的に調査しているわけではなく見聞の域を出ないが、アメリカの大学（あるいは高校も含めて）における外国語授業では、初級クラスを除いて英語を極力使用しないという環境がかなり確立されているように見受けられる。

外国語授業の初級レベルでは、イマージョン型ではなく、第一言語（母語）を適宜用いる方が教育効果が高いと言われている（Genesee, et al. 370）。とりわけ学習者が既に第一言語の技能を身につけている場合には、第一言語と第二言語（目標言語／target language）の関連を学ぶことにより、第二言語の習得がより効果的になる（Genesee, et al. 370-71）。金沢大学のほとんどの学生は、少なくとも中高6年間英語を学習しており、初級レベルの英語力は習得しているはずである。1年次学生向けに開講されている「英語B」のレベルが「中級」に設定されているのも、学生が既に基礎的英語力を身につけているという認識があるからにほかならない。中級あるいはそれ以上の授業では、とくにオーラルコミュニケーションの技能を高めることを目標にするのであれば、第二言語を教室言語のすべてないし大部分とするイマージョン型ないしバイリンガル型が有効であろう。無論、大学で学ぶ英語は、オーラルコミュニケーションに特化したものから専門性の強いものまでさまざまであり、必ずしも英語で授業をおこなうことが効果的でない場合もあるだろう。しかし、少なくとも学生に意

見や反応を述べさせたりディスカッションをおこなう場合は、目標言語である英語を用いるよう学生を促すべきであろう。

質問2「担当教員と教室での使用言語に関して、次のいずれが最も良いと思いますか」に関しては、授業の使用言語はすべて英語であるべきで、教員はネイティブか日本人の別にこだわらないという結果が出た。中級レベルのクラスでは日本語を介した方が学生の理解を助けるのではないかと日頃感じていたが、調査の結果、授業はすべて英語で通した方が学生の学習意欲を高めることが判った。留学準備クラスの担当教員に関しては、すべて日本人、あるいは日本人とネイティブの両方という意見が大半を占め、ネイティブ教員に限定すべきだという回答はなかった。これは、質問1の分析で述べたような、日本人教員が英語イマージョンクラスを担当することへの評価の裏書きとしてみなすことができる。

質問3は、現行の英語イマージョンクラスのあり方に関する学生の見解を引き出すことを意図するものである。質問1と2で日本人教員が担当することへの積極的評価が明らかになったが、その理由が、教室外での質問や相談が日本語でできるため授業に積極的に参加できるということ、ネイティブではない日本人教員が英語を用いる様子が良い刺激になるということ、そして国際社会の英語使用空間で通用する英語力が必ずしもネイティブのような英語でなくてもよいという見解にあることが、質問3の結果から読み取れる。

## 5. 課題

英語圏留学準備クラスとして開講されている英語Cは、留学準備クラスという名称が開講科目名として表に出るわけではないので、受講生は必ずしも留学希望者であるわけではない。しかし、『英語学習ハンドブック』（外国語教育研究センター制作）や国際課による留学関連広報により、留学希望者が留学前に受けるべき授業であるという認識は定着しつつある。また、実践的英語力を高めることに意欲的な学生が繰り返し受講するという傾向もみられる。ちなみに調査を実施した平成17年度前期英語Cの受講生7名のうち、3名は金沢大学派

遣留学生として前期終了後の留学が決定していた学生であった。

体系化後2年を経て、留学準備クラスは軌道に乗るとともに問題点も明らかになってきた。最後に、今後の改善に向けて、現行制度における問題点を挙げておきたい

**問題点1** 授業のテーマが日本に関連したものに限定される。

現行の体制は、金沢大学生とKUSEPの留学生とのジョイントクラスである。KUSEPの留学生の関心は主として日本語・日本文化にあるため、ジョイントクラスのテーマも自ずと日本文化に関連したものに限定される。かつて留学準備クラス(intermediate)のテーマをアメリカの環境思想に設定したことがあったが、KUSEPからの受講生は1名のみであった。

授業内外における学生の様子を見る限り、意見の述べ方や議論の運び方など実践面において、またより包括的な異文化コミュニケーションの点において、日本人学生が留学生との接触から受ける影響ははかり知れないものがある。さらに、KUSEPの学生は金沢大学派遣留学協定校の学生であるので、そのような学生と交流を深めることは、派遣留学を目指す日本人学生にとってきわめて重要な意味を持つ。このように留学生とのジョイントクラスは留学希望者や実践的英語力を高めたい学生にとって多くの利点を持つため、留学生の受講は確実にしておきたい。授業のテーマを日本関連のものにしているのはそのような理由による。しかし、テーマの限定によって、留学準備として不可欠な留学先(アメリカ、イギリス、オーストラリアなど)の文化を授業で扱うことが困難な状況も生まれている。

この状況を打破するためにどのような方策が考えられるだろうか。ひとつには、ジョイントクラスではない、金沢大学生のみを対象とする授業の新設が考えられる。しかしこの場合、留学生との議論等にもとづく具体的な異文化理解はほとんど期待できない。では、留学生をTAとする英語イマージョンクラスの運営を検討してはどうだろうか。そうすれば、体裁上は留学生とのジョイントクラスを維持しつつ、留学先の文化・社会をテーマとする授業が可能になり、授業を契機として留学生とのコミュニケーションが深まることも期待でき

る。授業のテーマの如何に関わらず留学生とのジョイントクラスを実現するために、今後TA制度の活用を検討すべきであろう。

**問題点2** 留学準備クラスが専門の授業と重なり受講できない場合がある。

これは全学的な時間割の問題である。現在は、全学年・全専攻の学生が受講できる教養的言語科目の時間帯が設定されていない。したがって、留学準備クラスを受講したくても専門の授業と重なり受講できない学生がいる。留学準備クラスは、必ずしも留学希望者だけが受講しているわけではなく、実際は実践的英語力を身につけたい学生の受講の方が多い。しかも、高年次学生の受講が目立つ。しかしながら、高年次学生には専門の授業との調整がつかないという問題を抱えている者が少なくない。留学準備クラスには、先述した留学生との接触によってもたらされる効果のほかに、専攻や学年が異なる学生との接触による効果もある。たとえば水俣の文学を扱う場合、文学的解釈から公害対策にいたるまで、受講生の専門に応じてさまざまなアプローチが出され、学生同士が互いに見解を広めあうことが可能になった。このように教室が学際的な場になるということは、学部・学年を問わずに受講できる教養的科目の最大の利点であると言える。教養的言語科目を全学部・全学年が受講できる時間帯が設定されることにより、学年・専攻横断的なダイナミックな授業の発展が期待できる。大学院も含めた全学的な英語の時間帯の設定を、今後の検討課題として提起したい。

### 引用・参考文献

Genesee, Fred, Kathryn Lindholm-Leary, Williams Saunders, and Donna Christian. "English Language Learners in U.S. Schools: An Overview of Research Findings." *Journal of Education for Students Placed at Risk* 10.4 (2005): 363-85.

大藪加奈「異文化理解と表現——留学生との合同授業の試み」『言語文化論叢』第7号（2003）：47-58.

ビアリストク、エレン、ケンジ・ハクタ『外国語はなぜなかなか身につかな

いか——第二言語学習の謎を解く』重野純訳、新曜社、2000.

## 註

- 1) 留学準備クラスの前身として、2000年度から始まった留学生とのジョイントクラス（英語C）がある（大藪参照）。また、2005年度には留学生センター教員が提供する授業も加わり、英語圏留学促進に向けた授業拡充の動きを呈している。
- 2) 結城担当分留学準備クラスにおける金大生の受講は数名程度であるが、学期第1週目のガイダンスにはその倍あるいは定員以上の受講希望がある。これまで、スクリーニングテストの結果を考慮しながらも学生の意欲をかって受講希望生全員の受講を認めているが、本格的な授業がはじまる2週目以降、「議論についていく英語力がない」「読む量が多すぎて負担になる」等の理由により、受講を取り下げる学生が続出し、学期前半に自ずと少人数クラス体制となる。しかし、このような不確実な要因による少人数クラス体制の維持には危険が伴う。留学準備クラス受講希望生にプレイスメントテストを課すなど、適当な措置が今後必要になると思われる。